

「個人化」「個別化」と「私事化」概念

— 概念の整理と指標化に向けて —

磯田 朋子* 香月 保彦**

Individualization, Individuation and Privatization

—with the Aim for Reconsideration of Concepts and Making Operational Definition —

Tomoko Isoda*, Yasuhiko Katsuki**

Many similar but different concepts about family individualization, individuation and privatization have been proposed. This article aims to reconsider these concepts and to suggest a new research framework of individuation and privatization inside/outside of family.

Confusions in these concepts are summed up in three dimensions, between individualization /individuation and privatization, between individualization and individuation, and between individuation as total concept and individuation as its factor. Our research group have thus far considered individuation as two dimension concepts, but suggest framework regarding individuation as three dimensions, individuation, togetherness and openness.

Key Words (キーワード)

Individualization (個人化), Individuation (個別化), Privatization (私事化)

I はじめに

1 私事化個別化議論の背景

「私事化」への着目はおおよそ、1980年代に始まる。

1983年の社会学評論は「日本社会の現状分析」という特集を組み、そこで、討論者であった鈴木広は、4名の報告者の報告から「私化」という概念を抽出する。家族社会学においては、その後、目黒依子の「個人化する家族」が出版され注目をあつめた。

この頃から、「私事化」と「個人化」は、類似のいくつかの概念とともに議論されてきた。筆者

らが、家族の「私事化」「個別化」として議論してきたものも然り、さらに、「多様化」「ライフスタイル化」なども同一の機軸にあった。

それから約20年を経て、2004年に、社会学評論は「『個人化』と社会の変容」と題する特集を組む。これは、とりもなおさず、現代社会の変容において、「個人化」がキーワードとなっているとの認識を示すものである。

2 本稿の目的

類似の概念が多出していることは、関心の高さを示しているが、一方で少なからず議論に曖昧さや混乱をもたらしてもいる。

* 呉大学社会学部健康福祉学科・呉大学大学院社会学部研究科 (Graduate School and Faculty of Science Information Science, Kure University)

** 呉大学社会学部社会学部研究科・呉大学大学院社会学部研究科 (Graduate School and Faculty of Science Information Science, Kure University)

これらの混乱の解消にむけて、いずれは実証的な分析を行うこととし、本稿において、まず概念の整理を試みたい。

II 3つの概念上の混乱

私事化、個別化と類似概念の混乱は、まず、大きく3点に整理できよう。

1 個人化／個別化と私事化

まず、一つ目の混乱は、個人化／個別化と私事化の混乱である。

(1) 私事化と個別化の共変性

家族社会学の領域では、この二つの概念はしばしば同一視されてきた。それには、2点の理由が考えられる。ひとつは、私事化と個別化の共変性である。私事化が個別化を伴う、あるいは、個人化／個別化の結果私事化するといった、両者の共変性が、両者をあたかも同一のものであるかのように見せた。その共変性を確認するにも、一旦それぞれをはかる必要がある。公と私が相対的、重層的な構造をもち（有賀1955）、全体が公、個が私に對置される社会にあっては、私事化は、単位降下を要件として進行する。そのため、私事化と個人化／個別化が共変関係にあると見なされた。

しかし、公と私の重層性は、必ずしも、同心円をなさない。公と私を、職域と家庭に對置させるのは、男性中心の視点あり、男女によって文脈は異なる。例えば主婦である女性が、仕事に就く場合、家族の許可を得て、「働かせてもらっている」と表現することがある。この時男性にとっては公的領域である職域よりも、この女性には、むしろ家庭こそが公的な義務の場として認識されているのである。こうした公と私のねじれなどを考慮するなら、仮にシステムの単位降下が私事化をさし、私事化が単位降下を要件として進むことがあるとしても、その意味の違いは切り分けておくべきであろう。筆者らの研究グループは、当初の段階において、私事化を領域の変化、意味の変化

とし、個別化を単位降下、サイズの変化として、整理を試みた。この点はひとまず継承していきたい。

(2) 「家族の私性」の自明性

個人化／個別化と私事化の混乱を招く2点目の理由は、家族の私性が自明視されるところにある。そのため、家族に向かう態度は、それ自体が、私事化と定義される。少なくとも、親族の大きな集団から核家族が自立する現象は、核家族に向かう私事化であると同時に、単位降下という意味で個人化／個別化とみなされる。家族の中の「個別化」は、さらなる私事化かどうかについて、議論されないまま、私事化＝個人化／個別化とする同一視は続いた。かつて、筆者らのグループは、「個別化する私事化」という概念を提出したが、必ずしも、私事化と個別化の切り分けには成功せず、のちに、単に「個別化」と表記するようになった経緯がある。

(3) 私事化の多方向性

個別化と私事化の混乱を招く第3の理由は、個別化がより小さい方へと一方向性をもつものに対して、私事化が多局面でおこり、多方向性をもつことにある。これは、私事化概念に複雑さと計測困難をもたらす。

こうした多面的、多方向的な変化を計測する際には、一方向的な概念である個別化を指標とすることには、一定の合理性と有効性があったため、むしろ意図的に両者は同一視された。

あるいは、私事化の定義、少なくとも作業的定義を行う際に、私事化の下位項目に個別化を含み、個別化を私事化の一側面とみなした上で、私事化の指標として個別化が用いられた。

(4) 私事化の諸側面

かつて、磯田は1980年代の私事化議論の中で、「私的なもの、公的なもの」がどのように定義、説明されてきたかについて概観し、8項目に整理した。それらは、大きく分けて、主体の領域、単位の問題（主体の私事化）と、関係や行為の契機、動機の問題（論理の私事化）とに分類される。今、その8項目をもって私事化を定義しよう

というのではない。下位項目とするには、網羅性も、独立性の吟味も不十分である。しかし、調査をしてその関係を確かめるには、少なくとも作業的な定義が必要であり、ふさわしい指標が求められる。上記の8項目のうち、意味の私事化としてまとめたものを中心に、再度整理をはかり、暫定的に以下の5側面を提案する

1) 規範非拘束性

公的世界は、官僚制的システムによって出来上がっており、行動の原理は規則に基づく。それに対して私的世界には、そうした規範が存在しないか、存在しても、関係性そのものが、関係性を規定する規範よりも重視される。

2) 情緒志向

公的世界では、合理性が求められるのに対し、私的世界では、合理性より情緒が重視される。官僚制的システムができていく過程で、近代的合理性となじまない情緒性が、私的世界に閉じ込められてきたのであり、その結果、情緒性は私的世界の本質にかかわる要件となった。

3) 公的世界への関心の撤退

私生活を重視する姿勢は、脱政治化、公的世界に対する関心の低下という形であられる。投票行動、報道に対する関心の低下等に私事化が見てとれる反面、インターネット上のコミュニティやボランティア活動によって、再度公的関心を見せる動きもある。

4) 短期的、直接的利益追求

私事化の議論において、宗教の領域では典型的な現象として、現世利益を求める態度に注目があつまった。此岸彼岸を越える理想を追求する姿勢が消え、今ここでの、短期的・直接的な利益が動機付けになるという点は、宗教的な態度以外にも現れているだろう。

5) 適応

かつて、井上は、文化の日常化を論じる中で理想に対するシニシズムにより、適応が充満し、超越と自省が衰退していると指摘した。

とにかく無理をしない、背伸びをしないで楽に行くという傾向は、様々な世論調査からも読

み取れる。私的な問題解決が志向され、ストレス対処においては認知的な対応がとられる。問題に直面した際、しかたのないことだとして受け入れ、認知的な対処行動をとることは、当人のストレスリリースには成功するが、問題の根本的な解決には向かわず、問題はそのままに残されることになる。同様の問題にぶつかる他者を考慮し、根本的な解決をはかるよりは、ひとまず自分だけは退避する傾向に、私事化志向をみることができよう。

以上のように、家族とは独立に、私事化の指標を作成することで、私事化と個別化の概念の切り分けをはかりたい。

2 「個人化」「個別化」の混乱

(1) ここまでの記述

私事化との混乱の整理のためひとまず個別化と個人化の差異を無視して、ここまで個人化／個別化と表記してきたが、個人化と個別化も似て非なる概念である。これについては、個人化／個別化と私事化よりは、意図的に、明示的に使い分けられた側面もあり、すでにいくつかの指摘と提案がある。

最初に注目されたのは、個人化であり、今でも多くの人が個人化を用いる。しかし、それに対して、筆者らは、日本には西欧的な意味での個人主義が確立しておらず、単位降下は個人の自立を意味しない点に注目して、個人化でなく個別化を用いてきた。個人化と個別化を並べて論じる形ではとりあげてはこなかったが、個人主義的な個人の自立にむかうものを個人化、個人の自立、あるいは自立への志向性を欠いたままで、単位が小さくなる現象を個別化と呼び分けた、ということもできよう。

(2) いくつかの切り分けの試み

長津は、生活編成の中心を個人価値の実現におくことを「個人化」、個人の欲求充足をはかる活動の単位がより小さくなる傾向を、「個別化」と呼び分ける。こうして、価値原理、あるいは志向性に関する「個人化」概念と、実態としての「個

別化」とを区別することで、個別化現象が、志向されたものか否かの分析が可能になるという。長津は、筆者らと共同研究をしたこともあり、その成果を踏まえた形で切り分けられている。

同じく、当初から共同研究者であった清水新二は、その後、基本的には、個人化を家族のありようを示し志向する概念として、個別化を具体的な現象を示す概念として使い分けることを提案するが、個人化をもちいることは、家族のパラダイムそのものの転換をも意味すると指摘する。これは、以下の山田の指摘ともつながっている。

山田は、「個人化」の議論を、家族の解体をも射程にいれる本質的な（傍点 筆者）「個人化」と、家族の枠内であって、家族を前提とする「個人化」とに整理する。ここでは、筆者がかつて「個別化（する私事化）」として議論した論考は、後者に分類されている。

清水が、「もはや家族は個別化の段階をへて個人化しつつある」と言う時、個別化は、山田のいう家族を前提とし、家族の中で起こる単位降下であり、個人化は家族の存在そのものを不要とする形での本質的な「個人化」にあたと解釈できよう。個人化は、他者との共存を否定しないが、少なくとも、家族の特権性を前提にはしない。

三者の整理は、微妙に異なってはいるが、個人主義が、家族（少なくとも日本の家族）主義と背反的であるなら、個人化は、家族の前提を揺るがすという意味で、山田のいう本質的な個人化であり、個別化の概念で語られてきたものは、家族を前提にした上での、態度や意識の単位降下と言える。

3 個別化の次元と要素

3つの概念の混乱の最後は、個別化の要素の問題である。

(1) 1次元から2次元

筆者らは当初、個別化と共同化を1次元の概念として測定した。そこでは、共同性の欠如＝個別化と捉えられており、個別化と共同化は、一つの軸の対極にあると考えられていたのである。

しかし、後に、必ずしも共同性の欠如ではない個別性の存在を考えるようになり、個別性と共同性を2次元で考えるようになった。

今、振り返ってみるなら、その発想の転換には、研究グループのメンバーの、共同性を失うことなく、個別性も尊重する夫婦への期待が込められてもいた。

そうした問題意識のもと、個別化と共同化を2次元の概念として捉えるようになる。

この時点で、個別化という概念をはかりながら、その要素にまた個別化があるという混乱を生じている。以後、混乱を避けるためには、必要に応じて、全体概念を「(全体としての、あるいは単に)個別化」とし、共同化、及びこの後にのべる openness とともに「(全体としての)個別化」の要素となる個別化を「(要素としての)個別化」としておく。

この2次元性は、1996年調査において、(要素としての)個別性と共同性の項目の主成分分析によって、2軸が検出されたことで確認された。

共同性は、一様に高く、分散が小さいのに対して、(要素としての)個別性は、分散が大きいこともわかった。2次元ではかりはじめた1986年調査の頃には、多くの人は、夫婦一心同体を志向しており、「私は私」という主張は、そうありたいと強く志向する人もいる反面、望ましくないと考えられる人も多いという実態があったのである。

しかし、その後の調査で、私立小学校の親のグループ（大学生の親よりは若く、階層的には少し高い）や働く女性の団体などでは、一般のデータとくらべて、個別化志向性が高いことなどがわかった。男性よりも女性の方が個別化志向性が高いという傾向も確認された。

こうした層から徐々に、個別化、すなわち、「家族であっても私は私」と私を主張する声や、もっと私を大事にしたいという声があがり、徐々に市民権を得ていくという形で個別化は進行する。

個別化が進行することで、個別性と共同性の併存は可能になるという側面もある。個別化の2次元性は単に操作的定義の問題ではなく、そうした

現象を反映するものでもあった。

(2) 3次元の発見へ

以後の調査は、個別性と共同性は2次元をなすものとして設計されるが、1996年調査の主成分分析の結果からは、3軸目の存在が伺われた。固有値はわずかに1を越える程度であり、もともと3軸を想定しての調査設計ではなかったため、十分に概念化しきれず、ひとまず、opennessのようなものだろうかと考えるにとどまり、その確認は、次の調査へと持ち越された。

しかし、その次の調査では、3軸目は検出されず、個別性と共同性の2次元概念枠組みを変更するには至っていない。

(3) 3次元め理念的意味

統計的には確認できず、概念化もされていないが、ここで3軸目の可能性について考えてみたい。

1) 関係性に関する概念

我々は、しばしば、個人<夫婦<家族<社会という同心円を考える。しかし、実際には、個人は夫婦や家族をこえて社会と接している。個人に向かう「個別性」、夫婦もしくは家族に向かう「共同性」、さらに家族外の他者に向かう「openness」を想定することは、一定の理論的必然性があると言えよう。

また、これまで、山田の指摘のとおり、われわれも家族を前提に、個人に向かう「個別化」を考えてきた。しかし、個人は、家族とだけ関係をもっているのではない。

家族外の間人間関係の発展が、家族・親族関係に及ぼす影響については、ポットとウェルマンの論争以降、いくつかの研究があるが、夫婦関係と、友人関係は競合するという結果も、競合しないという結果も存在している。

家族のソトの関係に多くの時間を費やせば、家族と過ごす時間は減少するという制約はあっても、家族のソトの間人間関係を志向することと、家族のウチの間人間関係を大切にすることとは、必ずしも相反しない。家族内の共同性が低ければ、ソトの間人間関係が充実するというものでないのはも

ろん、家族のウチの高い共同性を保ちつつ、人間関係を家族に閉じることなく、外に開いている人たちも存在する。こうした状況を描きわけていくには、opennessの導入が必要となる。

2) 個別化の収斂に関する論点

また、この議論は、20年前、研究に着手したころの、「個別化の単位は夫婦に収斂するか」という議論を再度思い起こさせる。

森岡清美は、彼の私秘化論を展開する中で、その単位は夫婦に収斂するとの見解を示す。個別化に着目した我々は、夫婦にとどまらず、個人にまで至るであろうという仮説を提示したが、これもまた、あくまでも家族を前提とした家族内での個別化の単位についての議論であった。

個別化の単位が個人にまで及んだとして、それは、必ずしも個人にとどまることを意味しない。夫婦にとどまる夫婦単位の私事化、個別化もありうるし、個人として自立（場合によっては孤立）する私事化・個別化もありうる。さらに、家族の中でみれば、個人単位にまで個別化しているように見えても、それは、家族の外に親密な関係の相手がいれば、共同性の総量が保たれている可能性もありうる。それは、家族相対的な重要性を低下させ、家族の特権性を脅かす。山田の言う本質的な個人化には、その意味でopennessが関連していると考えられる。

Ⅲ 調査に向けて

1998年に調査して10年がたつ。ここで、再調査をして確かめてみたい点がある。新自由主義、あるいは市場経済化の波は、強く我々の生活に影響を及ぼしており、社会全体の私事化は一見疑いない。そうした時代をうけて、家族の個別化・共同化・私事化は進行しているのか、いないのか、進行しているとすれば、どのような形で進行しているのか。

家族内では、個別化が進行し、家族の解体へと向かう現象が確認できるであろうと考える。しかし、その個人が、家族外の誰か別の個人と新たに

共同化しており、そこに着目するなら、実は個別化は進行していない、という可能性もある。そうした観点にたつて、個別化・共同化・私事化の実態を把握したい。

とりわけ、個別化の要素について、opennessが確認できるかどうか、分析してみたい。

親密な関係が家族に閉じる形で求められるのか、あるいは、家族外へと開くのか。家族は特権性を失い、相対化されるのか。

1989年の調査においては、個別化を志向する家族は、情緒的な関係が希薄であるという結果から、夫婦関係の悪化から個別の活動が志向され、共同性が否定される家族の状況が浮かび上がった。1999年調査でも、個別化を望まない人に比べると、個別化を望む人は、情緒を重視しないという結果が見られた。ここだけを見ると、個別化を望む人たちは、情緒的な関係を重視していないから、夫婦はバラバラで個別化しても構わないと考えているのだという解釈がなりたつ。自由記述のコメント等から、事実個別化を望む人々には、そうした夫婦も含まれていたと思われる。

しかし、比較すると、個別化を望む人の方が、望まない人より情緒を重視する度合いが低いという結果ではあるものの、実は、個別化を望む人も、情緒を重視していない訳ではない。この事実は情緒的な絆を重視しつつ、「私は私」という個別性も大切にしたい、という人々もいる、と考えるヒントになる。

本研究は、当初から、一様に一律に個別化するのでもなく、私事化するのでもないという点を重視してきた。その点を継承し、丁寧に、その現象を描いていく必要があると考えている。

以上のような課題のもと、調査の実施にむけて準備をすすめていきたい。

参考文献

- 1) 有賀喜左衛門, 1955, 「公と私－義理と人情－」『有賀喜左衛門著作集IV』, 未来社,
- 2) E.Bott, 1971, *Family and Social Networks, Norms*

and External Relationships in Ordinary Urban Families, New York Free Press

- 3) 井上俊, 1983, 「文化の『日常化』について」, 日本社会学会編『社会学評論』34(2) 30-37.
- 4) 磯田朋子, 1991, 「家族の私事化に関する実証研究」『家族社会学研究』3. 16-27
- 5) 磯田朋子, 1995, 「私事化・個別化と家族の統合」社会分析研究会編『社会分析』第22号 71-84.
- 6) 磯田朋子, 1996, 「家族の私事化」『いま家族に何が起きているか』, 野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編著, ミネルヴァ書房 3-27.
- 7) 磯田朋子, 2000 「私事化・個別化の中での夫婦関係」『結婚とパートナー関係－問い直される夫婦－』善積京子編 ミネルヴァ書房 147-167.
- 8) 目黒依子, 1987, 『個人化する家族』, 勁草書房
- 9) 長津美代子, 2007, 『中年期における夫婦関係の研究』, 日本評論社
- 10) 清水新二, 2001, 「私事化のパラドクス “家族の個人化” “家族の個別化” “家族の私事化” 議論」『家族社会学研究』13(1)
- 11) 鈴木広, 1983, 「たえず全体化する全体性と、たえず私化する私性」, 日本社会学会編『社会学評論』34(2) 41-45.
- 12) B.Wellman, 1979, *The Community Question: The Intimate Network of East Yorkers*, *The American Journal of Sociology* 84(5)
- 13) 山田昌弘, 2004, 「家族の個人化」『社会学評論』54(4) 341-354.

¹ 領域、主体、親密さ、結合の景気、準拠枠、求められる価値、欲望の制御の8項目で、うち、領域と主体を主体の私事化、その他の6項目を意味の私事化とした。